荒木牧人作　「あしたの二人」

＜前編＞

守野恒　僕の名前は守野恒。青春高校２年生。サッカー部に入っているんだけど、四歳の時、病気で片方の肺を失っている。だから部活の時は、グランドの端でシュート練習とか、パス練習とかしているだけなんだ。でも試合にはやたら強いので、時折、後半のラッスト　10 分や 5 分で起用される。ほかの部員のように　30 分間走りっ放しってのはできないけど、今のこの状態に一応満足している。

青柳慈愛　おい恒、早く教室に戻らないと、帰りのホームルーム終わってしまう　ど。

恒ナレーション　彼の名前は青柳慈愛。僕の一番の大親友だ。中学から一緒でサッカーも一緒に続けている。高校では、サッカーをあきらめようとしていた僕を食い止めて　くれたのも彼だ。“慈愛”という名は珍しいと思ったが、何でもキリスト教の聖書から取った名前だそうだ。いつもは　“ジャイ”と 呼んでいる。

女教師　特にあしたは運動部の人は地区大会で欠席が多　くなりますけど、一応、礼したあと、先生に名前を言いに来て　くださいね。それでは終わりにします。

生徒　起立！　気をつけ！　礼！

（効果音）　（教室の終業後のガヤ）

慈愛　今日の部活であしたのレギュラー発表だな。

恒　多分ね。

慈愛　でもおれたち、県大行　くまでに強豪に　2 つも当たってるんだぜ。クジ運悪いよな。

恒　何大丈夫。勝つって。

教師　（オフで名前を呼ぶ　）…以上のメンバーだ。サブメンバーは坂井、長沼、守野で行くぞ。いいな。

恒モノローグ　やった！　サブメンバーに入ったぞ。

恒　ジャイ。やっぱりセンターフォワードは君しかいないよ。

慈愛　うん、ありがとう。とにか　くあしたはい ら 相手が強くても勝ってみせる　さ。

（音楽）　（軽快な感じ）

ナレーション　いよいよ地区大会第　1 回戦の日。快晴だ。太陽が、まるで今から試合する僕らとグランドをスポットライトのように空高くから照らしている。

教師　とにかく油断するな。いつも勝つ気でいろ！　絶対せり負けなんてするなよ。実力は必ず出せる。ようし、思いっきりやってこい！

選手一同　はい！

（効果音）　「ピピー！」とホイッスル音）

ナレーション　試合が始まった。相手は去年地区3位だった南海高校。空中プレーがうま　く、足の速い選手がそろっている。その足に振り回され、10分、20分と　経過してい ら

ちに、僕らのパスワークが鈍ってきた。

恒モノローグ　ジャイ一人で抜いていけば、ほかは攻撃に回れるのに…。あっ！

選手A　横から来るぞ！　ゴール前に上げさせるな！

選手B　来るぞ、キーパー！

（効果音）　（ピピー！）

ナレーション　一瞬の隙を突いてパスカット　トされ、あっと言う間に先取点を取られてしまった。

慈愛　ドンマイドンマイ。まだ前半だよ。まず落ち着いて1点取り返そう。

ナレーション　さすがジャイは動じていない。いつでも点を取れると確信している。相手のポジションを見てニヤッと笑ったのはその証拠　　だ。案の定、ジャイはチャンスを逃がさず2点目を入れ、タイムアウト直前に3つ目のゴールを決めたのだ。

（効果音）　（ピピー！）

ナレーション　試合終了。

選手　（口々に）「やったー！」「回戦突破！」「今日は赤飯だ」

ナレーション　勝った。3対2の見事な逆転勝利だった。

教師　よーし。よくやった。先生は勝てると信じていたぞ。これであしたも学校を大きな顔で休めるな。

全員　はい！

教師　じゃ今日はしっかり休んでおけ。お疲れさん。

全員　（口々に）「さようなら」「お疲れ様」

慈愛　恒、一緒に帰ろうぜ。

恒　うん。

慈愛　今日は恒の出番なかったけど、それだけ余裕だったってことかな。

恒　何言ってんだよ。

慈愛　でもマジでおれとぴったりのコンビ組めるの、恒だけなんだからな。あしたは前半も後半も出てくださいよ。

恒　やめろよ。死ぬよ、わたし。（2人、笑う）

ナレーション　2回戦の相手ははっきり言って弱かった。パスは思い通りにできるし、敵の守りはすぐに崩れるしで、落ち着いてプレーし、2対0で勝った。

選手A　今日はあまりてこずらないですんだな。

選手B　でもあしたは2試合あるだろ。そのうち、2試合目って絶対死闘になるだろうよ　　。

選手A　何で？

選手B　え？　知らないの？　去年、県大2位の…。

選手A　丸高だ！　マジかよ。

選手B　でも、ここに勝たなきゃ県大なんて行けないぜ。

ナレーション　そうなんだ。丸子工業高校。県でも有名なサッカー高で、ずば抜けて強い。特に守りが堅く、今大会はまだ全試合無失点なのだ。

恒モノローグ　勝てっかな。相手が悪いよなぁ。でも勝つ。勝たなきゃ。

ナレーション　不安と希望の一夜が明けて、その日の朝が来た。

教師　よし、今日は2試合あるが、1試合目より2試合目のほうが重要になってくる。とにかく1試合目で力を全部使い切らないように。この2つに勝てば県大会出場だ。絶対勝とう。

全員　はい！

ナレーション　第1試合が始まった。断然こちら有利という感じだった。キーパーのミスで1点取られたものの、4対1で勝った。そしてついに地区大会決勝戦。相手は強豪丸子工業高校。

慈愛　恒、後半出てくれよ。大丈夫だろ？

恒　いえいえ、わたしなんぞの虫ケラが、こんな大舞台でプレーするわけには…。

ナレーション　その時、僕は強烈なジャイの視線を感じた。

恒　も、も、もちろん出るさ。当たり前のことを言うな。

ジャイ　じゃ先生に頼んどくからな。

ナレーション　前半が始まった。始めからすごい競り合いで、選手の顔は皆殺気立っていた。なかなかどちらも攻めらしい攻めができず、中盤での混戦状態が続いた。うちらの選手が反則されケガをしたので、僕が出るかな？　と思ったけど、ほかのサブの坂井君が出場した。

（効果音）　（ピピー！）

教師　いいぞ。実力はほとんど同じだ。あとは気力だな。勝つ気でいればいつかはチャンスが来る。1点にかけろ。死ぬ気でやるんだ。

恒　先生、後半、ラスト10分で出ます。

教師　よし分かった。丸高のディフェンスを突破できるのは、お前と青柳のコンビだけかもしれないな。ちゃんとアップしとけよ。

ナレーション　後半が始まった。今までになくワクワクした。こんな盛り上がっている試合でプレーできるからだ。緊張よりも出られる喜びのほうが断然勝っていた。みんなボールが転がると全力疾走で食らいついていった。予想通りの“死闘”だった。僕は何かに取り付かれたように、試合に見入っていた。

教師　恒！　そろそろだぞ！

恒　あ、はい！

ナレーション　僕は我に帰り、立ち上がった。

恒モノローグ　後半20分。0対0か…。よっしゃ、1点取ってきてやる。

教師　よし今だ。恒、行け。

恒　はい。

ナレーション　14番の背番号を着け、僕はグランドに足を踏み入れた。

ジャイ　恒、よく来た。何かてこずってるけど、きっとこれは1点勝負だ。取ろうぜ。

恒　　よし任せろ。
選手A　　恒、パスするから、ジャイと2人で攻めて　　くれ。ちゃんとフォロー出るから。
恒　　分かった。
ジャイ　　来るぞ！　恒はあの9番マークして　くれ。
恒　　オーケー。
ナレーション　　時間が残り少ないことから、相手は津波のような全員攻撃に出た　　。それはまるで戦闘の最前線を行く若い兵士のようだった。
選手A　　マンツーマンでつけ。絶対抜かせ　るな。
選手B　　ここを止めたら、恒にパスだ。
ナレーション　　すごい！　一つのえさに群がるピラニアだ。
女子　　シュート～～！
選手B　　キーパー～！
キーパー　　ぬりゃー～～！
ナレーション　　ゴール左隅の一番低いところに直線に飛んでい　くボール。
キーパー　　止める～～！
（効果音）　　（どさっとキーパーがポストに激突する音。）
ナレーション　　止めた。ゴールを死守した。だけどキーパーはそのまま横のポス　　トに激突した。
キーパー　　うっ　クソ、いてえ。おらぁ恒、ラストチャンスだ。行けー！
ナレーション　　前方に1人、一足早く上がっていた僕にボールが飛んで　くる。すぐ横にジャイが来た。
慈愛　　行くぞ、恒！
恒　　カウンターアタックだ！
ナレーション　　僕はジャイにパスを回した。完全に手薄となった丸高ディフェンスを、持ち前のドリブルで1人、2人抜いたジャイ。あとは最後のディフェンス2人にキーパーだ。その後ろに白いゴールが見える。
全員　　（口々に）『行けー！』『抜けー！』『決まって～！』
ジャイ　　それ、恒。
恒モノローグ　　よし、ナイスパスだ。
恒　　もらったぜ。シュー～！
ナレーション　　ディフェンス2人が僕のほうへ寄る。
恒モノローグ　　かかった！
恒　　それ。
ナレーション　　あの体勢では、ディフェンスはとても僕のジャイへのパスは取れない。
慈愛　　オーケー、ナイスパス！
ナレーション　　キーパーと1対1のジャイ。キーパーは前へ出ずに入られない。そこを回り込んでジャイの必殺の一撃！

（効果音）　（ピピー！）
全員　（口々に）歓声。「やったー！」
恒　ナイッシュー、ジャイ！
慈愛　ナイスパス　恒！
（効果音）　（ピピピー！）
恒　試合、終わった…。
ナレーション　こうして決勝戦が終わった。死闘の果ての1対0の勝利だった。僕は先生にみんなと焼き肉バイキング　をごちそうしてもらい、たらふ　く食べて家に帰ると、お祝いの食事に外出した家族を見送り、そのままソファーに倒れ込んだ。
（効果音）　（電話のベル。以下のナレーション の背後で鳴り続ける。）
ナレーション　だが、死んだように眠り込んでいた僕には、何度も鳴る電話の相手が、その時必死に告げようとしていた悲報など、知るよしもなかった。

<後編>
ナレーション　僕は守野恒。青春高校2年生。僕の入っているサッカー部は、数々の困難を乗り越え、ついに県大会出場の切符を手に入れた。
恒　ただいま。
妹美世　お帰り、兄ちゃん。県大　会行った？
恒　うん。1対0で丸高に勝った。
美世　（奥のほうに ）お母さーん。兄ちゃん県大行けるって～！
母　あら本当？　すごいじゃない！　じゃ美世ちゃん、お約束どおり、焼き肉屋行きましょ。お兄ちゃんは？
恒　僕は先生におごってもらって食べてきたよ。焼き肉バイキングで。
母　あら、そうだったの。じゃあいいわ。美世ちゃんとお父さんと3人で行って　くるわね。
ナレーション　僕はソファーに寝そべると、疲れがどっと出てきて、そのまま眠ってしまった。
（効果音）　（電話のベル。以下のナレーション の背後で鳴り続ける。）
ナレーション　僕が眠り込んでいる間、何度も電話がかかってきたらしい。僕は全然気がつかなかった。
美世　ただいまー。おなかいっぱい。
母　ただいまー。はい 、お土産。
恒　あ、シュークリームだ。やったぜ。6個全部食べちゃうよ。
美世　あ、あたしにも1個ちょうだい。
恒　今美世はおなかいっぱいだって言ったじゃん。
美世　乙女心は複雑なの。
恒　何それ？

（効果音）　（電話のベル）

母　はい、もしもし　。守野でございます。どちら様ですか？　え？　あ、どうも。いつも恒がお世話になってます。え？　まぁ…え？　ええ?!　は、はい、そうですか。本当にまぁ…。分かりました。伝えておきますわ。何かありましたらすぐにご連絡　ください。はい、それじゃ。

（効果音）　（電話の切れる音）

ナレーション　何かとてつもな　く嫌な予感がしたので、僕はあえて相手がだれだったのか聞こうとしなかった。でも母さんがこっちを向いているのが、下を向いていても何となく分かった。

母　恒。

恒　何？

美世　どうしたの、母さん？

母　慈愛君がね、さっき交通事故に遭って、今かなり危険な状態だそうなの。

恒　本当かよ、それ ?!

ナレーション　空っぽの頭に、ドサドサと何か　重たいものが落ちてきた気がした。

恒モノローグ　ジャイが…。ジャイが…。

ナレーション　時計は夜の 10 時を回っていた。ベッドに入っても頭がさえて、眠れな　くてどうしようもない。そんな時、僕はふと机の本棚から、少しほこりをかぶった一冊の本を取り出した。それは聖書だった。その聖書は中学　3 年の時、受験勉強が思うように進まなくてかなり荒れていた僕に、ジャイがプレゼントして　くれたものだった。

恒モノローグ　えーと、確かこの辺だったよな。

ナレーション　僕はあの時、ジャイに教えてもらった箇所を探し当てた。

恒モノローグ　あった。ここ、ここだ。

ナレーション　ヨハネ 14 章 1 節と 14 節だった。

恒　（読む）あなたがたは心を騒がしてはなりません。　（途中からキリストの声に。エコー）神を信じ、またわたしを信じなさい。あなた方が、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。

ナレーション　この言葉は、僕の胸の中に痛いほど広がっていった。

恒　神様…。イエス様　。あなたの名によってお願いします。ジャイが無事でありますように。

ナレーション　それは、僕が無意識のうちにはじめてささげた、と言うより口走った祈りだった。次の日、早速見舞いに行こうと思ったが、日曜日ということもあり、面会は無理だった。

恒モノローグ　ジャイ、しっかりしろよ。治るんだぞ。なおってもう一度一緒にサッカーやるんだ。と、その時だった。僕はある声を聞いた。

ジャイ　（エコー）恒！　教会に行ってごらんよ！

恒　　ン?!　ジャイ…　　ジャイか　？

ナレーション　　もう声はしなかった。周りを見たがだれもいない。だが、あれは確かにジャイの声だ。僕はとにかく教会へ行ってみることにした。

恒モノローグ　　確か、ここら辺だった…　　と思ったんだが、あ、あれかな？

ナレーション　　入るのにはちょっと抵抗が合ったが、ジャイのことを思うと入らずにはいられなかった。

（音楽）　　（賛美歌。BGM に）

牧師　　ようくいらっしゃいました。

ナレーション　　入るなり、いきなりあいさつされてしまった。

恒　　あのう、親友が交通事故で意識不明の重体なんです。祈ってもらえませんか？

牧師　　何とまあ…。大変なことですね、それは…。

ナレーション　　そう言って、その牧師さんは熱心に祈って　　くださった。僕はお礼を言い、　「また今度来ます と　言って、その場を去った。祈ってもらった手前、礼拝に出なき　　ゃ悪いかなとも思ったけど、何とな　　くジャイのことが気になってならなかったのだ。

恒　　ただいま。

美世　　お兄ちゃん。す、すぐに駅前の市立病院まで行って！　　早く!

恒　　どうした？

美世　　ジャイ君が死にそうなの。

恒モノローグ　　クソー。間に合って　　くれ。

ナレーション　　病院に着くと　、病室には、ジャイの両親と医師が頭から全身包帯を巻いたジャイを見守っていた。

恒　　ジャイ！

慈愛の母　　ああ、恒ちゃん。

恒　　ジャイ、僕だ。恒だ。

慈愛　　（弱々しく）ああ、芝生のサッカー場が見える…　　。絶対に勝つんだ、おれたち。

慈愛の母　　慈愛、しっかりするのよ。

慈愛の父　　慈愛、イエス様がついておられるからな。

慈愛　　あ、監督は…、白い着物を着たイエス様だ…。

医師　　意識が混濁しています。残念ながら、もう本人には呼びかけても聞こえないと思います。

慈愛　　恒、サッカー場だ。県大決勝戦だぞ。すごいぞ、おれたち…。

ナレーション　　僕は周りを見た。みんな泣いている。おじさんが僕を見て言った。

慈愛の父　　死ぬ間際の空想に浸っているらしいんだ。意識がな　　くなるまで、ずっと君のことを待っていた。恒君、お願いだ。話を続けていて　　くれないか。

恒　　分かりました。ジャ　　イ、そうだよ。県大決勝戦だ。僕も今日はフル出場するぞ。

ナレーション　　その時、不思議なことが起こった。もう聞こえないはずの僕の声にこたえるかの

ように、ジャイは…、ジャイは僕に向かって話し掛けたのだ。

慈愛　絶対、勝とうな。

恒　勝つ。絶対に。

慈愛　監督はイエス様なんだぜ。

恒　イエス…？　あ、イエス・キリストのこと？

慈愛　相手は…、悪魔なんだ。

恒　悪魔？　悪魔との決勝戦なのか？

慈愛　恒。絶対、勝とうな。

恒　ああ。イエス様が監督だぜ。負けるはずないじゃないか。

慈愛　恒、恒。イエス様信じろよ。そして　、天国でもまたコンビ組もうな…。

ナレーション　慈愛は目を閉じた　。閉じた目の間から一筋の涙が流れた。

（音楽）　（BGM　讃美歌「神ともにいまして」）

ナレーション　告別式は、次の日の夜、あの教会で行われた　。先生や、クラスのみんな、サッカー部の仲間も参列していた。

恒　先生、ジャイがかわいそうで…。

教師　うん。こうなったら、みんな、ジャイのために絶対勝つぞ。たとえ　1　回戦だけでもな。

恒・みんな　（口々に『　はい『　勝ちます『　涙声も）

恒モノローグ　ジャイ、僕はやるよ、君の分も。天国でしっかり見てて　くれ。

ナレーション　僕はお棺の中で、かすかにほほえんでいるジャイに向かってそうつぶやいた。泣くまいと必死にこらえていた僕の胸に、その時熱いものがどっと込み上げてきた。

恒モノローグ　ジャイ…。ジャイ…。

ナレーション　僕は逃げるように外に出ると、まるで子供のように泣きじゃ　くった。次の日、県大会 1 回戦の朝が来た。真っ青な快晴だった。

教師　よし、とにか　く県大なんだからいつも全力を出せよ　。負けるな　。シュートチャンスがあったらどんどん打っていけ。

選手一同　はい！

（効果音）　（ピピー！）

ナレーション　試合が始まった。

全員　（口々に『　行けー！『　決めろ！」

ナレーション　前半終了 1 対 1 の同点。予想通りの接戦だった。

恒　先生。後半、僕、フルで出ます。

教師　そりゃうれしいが、大丈夫なんか？

恒　はい、できます。

教師　よし。じゃ増田！　守野と代わって　くれ。それじゃ始まるぞ。へばったら代わらせ

るから、思いっきりやってこい！

ナレーション　自分でも驚いた。生まれて初めて後半をフルで出たのに、僕は何とか最後まで持ちこたえた。自分の中にだれかがいるような、不思議な力が僕を支えたのだ。

（効果音）　（ピピピー！）

ナレーション　そんな僕を先生やみんなが驚く中で、僕たちは2対1で1回戦をものにした。2回戦目の朝、僕は机の上にあるジャイの写真に向かって言った。

恒モノローグ　ジャイ。今日は初めてフル出場してみるよ。今日の相手は僕がいなきゃ勝てないような気がするんだ。大丈夫、イエス様がついていてくれる。僕らが弱くても、イエス様は強いからな。そうだろ、ジョイ？

教師　何、フル出場？　バカ言うな、守野！　昨日、後半初めてフルで出したけど、あんなに呼吸が乱れていたじゃないか。

恒　先生。僕が出なきゃ今日で負けてしまうんです。もうジャイはいないし、会に来られるのも今日が最後かもしれないんです。お願いします！

ナレーション　前半が始まった。センターフォワードに僕がいる。10分、20分、25分、たちまち前半もわずかとなった。

恒モノローグ　ククノ！　苦しい、胸が…。

（効果音）　（ピピー）

ナレーション　前半終了。

教師　守野、もういい。交代しろ。

恒　先生！　後半もこのまま出さしてください。点取ります、絶対。

教師　しかし、お前…。

恒　みんな、頼むからボールを僕に回して。今日の僕は、ジャイの身代わりなんだ。ジャイと二人分なんだ。

選手A　わ、分かった。

（効果音）　（ピピー）

ナレーション　試合は1点を争う白熱戦となった。残り時間はあと1分。

選手A　それ、恒～！

恒モノローグ　ボールだ。神様、力を、力を与えてください。ジャイ、苦しい。胸が苦しいよ。ジャイ、隣に君がいないと…。え？　相手が…。あれは悪魔？　そんなはずは…。

慈愛　（エコー）悪に負けてはいけません。かえって善をもって悪に打ち勝ちなさい。

恒　ジャイ？　ジャイなのか？

選手A　恒、どうしたんだ？

恒　神様、ありがとうございます。

選手A　何を言ってるんだ、恒！

恒　それ、シューッ！

ナレーション　僕が渾身(こんしん)の力を込めてけったボールは、まるで吸い込まれるように、敵のゴールに突き刺さっていった。

教師・選手たち　やった、やったぞー！

応援席　わぁー！

ナレーション　僕は途端にスーッと気が遠くなって、その場に倒れ込んだ。（間）その時、僕は夢を見ていた。真っ白いグランド。監督のイエス様の前に、泥まみれのジャイと僕がいた。そして二人は手を取り合って、いつまでもいつまでも喜び踊っていた。

＜完＞